

2. 事業の目的と概要	
(1) 事業概要	南アフリカ（以下、南ア）では、貧富の格差や高失業率が解消されず社会状況が悪化するなか、子ども・若者が大きな影響を受けている。エイズで親を亡くす子どもも後を絶たない。また農村地域では親などが出稼ぎのため不在で子どもだけで残される世帯が少なくない。貧困下にありかつ日常生活で大人による保護が受けられない、家庭環境が困難な状況にある子どもたち（Orphan and Vulnerable Children 以下、OVC）は、普段の生活がままならないことに加え、ドラッグ、犯罪、暴力など様々な社会リスクに対して脆弱である。 同国では公的な制度に基づき、村の住民「ケアボランティア」が運営し、OVC が通うことができる Drop in Center（以下こどもケアセンター）が各地に存在するがケアボランティアの多くがケアに関する情報・知識もないまま活動している。 本事業では、対象地域 1 村のこどもケアセンターで、ケアボランティアたちにケア¹に関する研修を実施し、OVC に対する地域のケアサポート体制を強化していく。同時に、次世代の子どもたちの態度・行動変容を通じて世代を超えた悪循環を断ち切ることを目指し、こどもケアセンターに通う 10～20 代前半の青少年 を対象に²ライフスキル／リーダーシップ研修などを実施、彼ら・彼女らが自ら考え行動し、課題に対応するなどの力を身につけるよう支援する。 Orphan and Vulnerable Children are vulnerable to social risks while their ordinary life cannot be maintained well. Drop in Centers (DIC), where OVCs can pass by, are run by village residents "care volunteers". JVC provides care trainings to the volunteers and strengthen community support system for OVCs and also leadership training to the youth at DICs.

¹ OVC に対するケアには大きくわけて 2 種類ある。ひとつは、ケガや HIV/エイズやその他病気に対する地域保健的なケア（服薬サポートや応急処置など）、もうひとつは、さまざまな形の虐待（身体的暴力による虐待のみならず、ネグレクトや暴言による精神的虐待、性的虐待含む）、身分証がないことで学校に行けない状況、家庭環境ゆえ学校の制服が準備できない、親が突然病気になる、亡くなるなどして親類を探してフォローアップする・・・といった、地域のソーシャルワーカーや教員、村長、警察などと協力して行う社会的ケアがある。いずれも、子どもたち自身が、あるいは家族が、これら課題を「恥」と考え、隠す傾向にあるため、虐待や人権に関する知識を身につけると同時に、カウンセリング等のスキルを得て課題を課題として認め発見できるようになることと、適切な地域リソースに関する情報を得て、必要とされるところで紹介するなどのスキルが必要とされる。本事業ではこれらの知識、情報、スキルを得るための研修を提供し、日常的にそれを活用できるようフォローアップに注力する。

² 青少年を対象とした研修内容としては、①人権・ジェンダー（特に女性の地位が低い）・セクシュアリティ、HIV/エイズや性感染症と予防、将来について考えるワーク（10 代で妊娠すると将来どのような困難があるか、関心がある職業など）など「ライフスキル」と呼ばれるものと、②環境問題や地域社会の成り立ちなど自分を取り巻く社会について学ぶものや調理や片付けなど暮らしまわりのスキルを学ぶもの、③また遊びながら学ぶ救急法や様々なゲームなど、DIC の日常的な活動プログラムを学び、それを行うなかで、チームワークとリーダーシップを身につける（グループに分かれて交代でリーダーになり活動をリードするようになっている）内容などで構成される。また、④菜園づくりと栄養も学ぶ。これらを通じて、自分で正しいと思うことを考え、判断する力を身につけ、仲間と支え合うことで問題解決ができるといった経験をもつことで、ピアプレッシャー（「早期の性交渉や、ドラッグが格好いい」といった同調圧力）などに流されず、困難な状況下でも生きていくことができるという尊厳・自信と選択する能力・行動力を養うことが期待される。本事業ではこれらをまとめて「ライフスキル／リーダーシップ」と呼んでいる。

(2) 事業の必要性と背景³	(ア) 事業実施国における一般的な開発ニーズ 南アでは、過去 10 年にわたり経済停滞が常態化するなか、失業率が 24%から 28%へと悪化しており、人口の約 8 割を占める黒人においてはこれが約 40%にのぼる。一方で、インフレ率は毎年 5～6%上昇し、人口の 56%を占める貧困層の生活は苦しさを増し「世界一の格差社会」と言われている。不安定な社会状況の影響を特に受けているのが子ども・若者で、南アの若者世代（14～35 歳）の失業率は 50%を超える。 希望・先行きが見えないなか、若者の不安・ストレス・不満がドラッグ、アルコールや犯罪につながり、連動する形でゼノフォビア⁴やレイプが多発するなど、より脆弱な立場に置かれた人びとが日常的に暴力に晒されている。このことが、貧困や女性の地位の低さなど様々な社会背景と絡む HIV/エイズの課題にもつながっている。現在、15～49 歳の 5 人に一人が感染、このために、現在も、130 万人ものエイズ遺児が（エイズで親を亡くす子ども）がいる。こうした状況が次の世代の貧困とその結果としての社会課題（教育機会の喪失、高失業率、犯罪、HIV/エイズなど）につながり、社会状況が総体として世代を超えた悪循環に陥っている。 (イ) なぜ申請事業の内容（事業地、事業内容）なのか ■事業地 事業対象地のリンポポ州は農村地帯が多く、黒人人口の割合が 90%以上で、南ア国内でも貧困州に位置づけられる。高校卒業資格試験合格率が 29% と国内 9 州の中でも低く、同州の実質的な非就業率は約 40%と報告されている。都市部への出稼ぎが固定化し、州の人口の 7 割弱が 29 歳と若い。HIV/エイズについては、感染率は 8%（2016）と全国平均より低い、2015 年度の同州内の受検者間の感染率は 20%で、潜在的な感染の可能性が高いと言われている。なかでも事業地のベンベ郡は、南ア最北部に位置し、州都・ポロクワネからも遠く、保健や教育、その他社会開発にかかる政策実施が遅れている。 ■事業内容 エイズによる死や出稼ぎ等による保護者の不在、貧困など、困難な家庭環境にある子どもたちが集まり、安全に過ごせる場として、南アフリカの村々には社会開発省のもとこどもケアセンターが設立されている。こどもケアセンターの、多くは村の母親たちが担うケアボランティアによって運営され、子どもたちが学校帰りに立ち寄ることで、保護され、必要なケアを受け、また勉強のサポートを受けたり、同じような環境下にある他の子どもたちと過ごすことで、支え合うことなどの社会性を身に着けることなどが期待されている。また給食を提供することもその役割として位置付けられている。しかし実際には、多くのケアボランティアは研修を受ける機会もなく、子どもに適切なケアを提供したり、こどもケアセンターを子どもにとって「通う魅力のある場」として運営するための知識や技術を十分に持たな
----------------------------------	--

³ 本事業では、家庭環境が困難な状況下にあり、DICに通う子どものうち、10～20代前半の若者を「青少年」と呼び、対象とする。DICには原則としては、5～18歳の子どものみが行うことになっているが、20代前半を事業対象に含むのは、様々な理由で学業が遅れ、20代前半で高校に通っている青少年も少なくなく、DICが支援対象として通うことを許可しているため（活動対象 DICに限らず他 DICでも一般的にこの傾向が見られる）。

<https://www.jetro.go.jp/world/africa/za/stat.html> 10 年統計より

<http://www.statssa.gov.za/?p=10334>、<https://www.fin24.com/Economy/Labour/News/sas-unemployment-crisis-in-numbers-20181001>

<https://www.statista.com/statistics/370515/inflation-rate-in-south-africa/>

<http://www.statssa.gov.za/?p=10334>

<https://tradingeconomics.com/south-africa/youth-unemployment-rate>

<https://tradingeconomics.com/south-africa/unemployment-rate>

⁴ 「外国人に対する嫌悪感」と日本語訳されるが、南アフリカでは、これが特に周辺アフリカ諸国から流入してきた移民に向けられ、襲撃が起きている。

い。そのため、ケアボランティアがケアに関する知識を身につけるとともに、OVC がこどもケアセンターに関心を持って通えるように、こどもケアセンターの日常的な活動を充実させ、魅力的な場とする必要がある。 また、南アでは、アパルトヘイト下で、黒人社会における伝統的な農業が破壊されてきたことから、農村部で生計が立てられず日々の食事もままならない状況である。このため、OVC に持続的に食べものを提供することもこどもケアセンターの役割として期待されているが、先述の歴史的背景から農村部でも農業を行ったことがない人も多い。 そこで本事業では、まずケアボランティアを対象に、これら 3 点（ケア、こどもケアセンター活動、菜園づくり）の研修を行う。その際、こどもケアセンターだけでは解決できない問題も多く、住民等と協力しながら OVC のケア、課題解決にあたる地域作りを目指す。 一方で、上述のとおり、OVC が様々な社会リスクに脆弱である現状を変えるには、OVC がこどもケアセンターでケアを受けるだけではなく、OVC 自身が HIV/エイズや性感染症、自分たちの暮らしや社会、権利について学ぶ必要がある。様々な場面で尊厳をもって判断し、適切に選択・行動できるようになり、自分を取り巻く状況を変え、道を切り開く力をつけることが期待される。これを、10 代から 20 代前半の、政府や国際機関による様々な支援から漏れがちな青少年世代に対して行う。 以上を受け、悪化する社会状況下で、こどもケアセンターを中心に、地域の人びとが OVC に適切なケアを提供すると同時に、青少年らが、社会リスクを避け、自らの力で未来を切り開くための力をつけていく。また、それを通じて長期的に世代を超えた悪循環を止め、あらゆる子どもが苦しまない社会づくりが必要と考え、過去の活動の経験と学びを周辺地域に展開・発展させていくことを目的に本事業を実施する。 ●「持続可能な開発目標(SDGs)」との関連性 上記の状況の中で、本申請事業と SDGs は特に以下の分野で合致し、またその達成に寄与する活動である。 ■目標 1. あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる→1.1 で極度の貧困を終わらせる、1.5 で貧困層や脆弱な状況にある人びとのレジリエンスの構築に触れている点。 ■目標 2. 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する→2.1 で貧困層及び幼児含む脆弱な立場になる人びとが安全な食料を十分得る、2.5 で多様化された種子と近隣野生種の遺伝的多様性の維持に触れ、伝統的な知識へのアクセスとそれによる利益の衡平な配分に触れている点。 ■目標 3. あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する→エイズ、結核などの伝染病に対処する、3.5 薬物乱やアルコール乱用の防止とある点。 ■目標 4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する→目標 4.5 で、脆弱な立場にある子どもへの教育・職業訓練へのアクセスに触れ、4.7 で、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得するための、人権、非暴力文化等の理解・教育推進に触れている点。 ■目標 10. 各国内及び各国間の不平等を是正する→目標 10.2 では、人種、出自、その他の状況に関わりなく、すべての人々の能力強化及び社会的、経済的及び政治的な包含を促進するとある点。 ■目標 16. 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある
--

	包摂的な制度を構築する→目標 16.2 で、子どもに向けられたあらゆる暴力の撲滅がうたわれ、16.7 では参加型の意思決定確保に言及されている点。					
	ジェンダー 平等	環境援助	参加型開発 ／ 良い統治	貿易開発	母子保健	防災
	1:重要目標	0:目標外	0:目標外	0:目標外	0:目標外	0:目標外
	栄養	障害者	生物多様性	気候変動 (緩和)	気候変動 (適応)	砂漠化
	2:主要目標	0:目標外	0:目標外	0:目標外	1:重要目標	0:目標外
●外務省の国別開発協力方針との関連性 経済・社会的格差の拡大を課題とし、コミュニティ開発支援等を通じてこれの是正を促進するという取り組みと合致する。						
●「T I C A D VIおよびT I C A D 7における我が国取組」との関連性 「若者への教育・職業訓練等をはじめとする平和と安定の実現に向けた基礎作り」のために人材育成と食料安全保障の強化が位置付けられている点が本事業と合致する。 家庭環境が困難な状況下にある OVC を持続的にケアサポートしていく地域をつくり、また、OVC のうちの青少年世代が、リーダーシップ研修を通じて、尊厳をもって生きていくための力をつけることを目指し、これらを様々な知識・情報を得るための研修を通じて行う本事業は、「T I C A D VIにおける我が国取組」のⅢ繁栄の共有に向けた社会安定化の「教育や職業訓練等の人材育成を通じてアフリカの平和と安定の実現に向けた基礎を作る」という取組に貢献するものである。ケアボランティア 20 名、青少年約 100 名（←3 年後）、年少の OVC 約 300 名（同）、地域住民約 3, 000 世帯の参加と地域行政との協力を通じて行う本事業は、人材育成を通じてアフリカの平和と安定の基礎づくりにつながる。						
(3) 上位目標	リンポポ州ベンベ郡チュラメラ地区において子ども・青少年を取り巻く社会環境が改善される。					
(4) プロジェクト目標 (今期事業達成目標)	活動対象地における地域住民による OVC へのケアサポート体制強化と青少年のリーダーシップ育成 ・ケアボランティアが OVC のケアに関する知識とこどもケアセンターの活動を改善するための知識を得て、それを活用し始める。 ・青少年がリーダーシップ/ライフスキル研修を受けて、知識を得て、それを活用し始める。 ・ケアボランティアと青少年が菜園づくりにより年間を通じて食べ物を得られる					

	ようになる。
(5) 活動内容	南アフリカの農村部において、地域の人々が OVC を持続的に支えると同時に、将来的に子どもたちが「貧困」で苦しむことのない社会を作るためには、困難な状況下にある子どもたちにケアを提供することに加え、子どもたち自身の態度や行動を変えていく必要がある。そこで本事業では、 1. OVC に対するケアの質の改善とコミュニティ内のケアサポート体制の強化 2. こどもケアセンターの日常的活動の強化（年齢別活動の実施） 3. 青少年のエンパワメント（リーダーシップ/ライフスキル研修の実施） 4. 菜園づくり を実施する。 <1 年次> 1 年次事業では、活動 1～3 においてケアボランティアと青少年がそれぞれ研修で学んだことを、活用し始めること、活動 4 については、菜園づくり研修の結果、年間を通じて栽培を行い、継続的に食べ物を菜園から得られるようになることを目指す。 なお、活動 1～3 については、研修は後述のとおり、外部の研修機関に委託するが、その中で申請団体は活動のコーディネーションとファシリテーションの役割を果たす。具体的には、活動 1～2 においては、日々のモニタリングを通じて、前研修で学んだことの定着具合の確認や、不明な点があればそのフォローをするとともに、ケアやこどもケアセンターの活動においてケアボランティアが抱える課題などを把握し、次の研修の構成（例えば、カウンセリングと言っても、OVC から話を引き出すのが難しいのか、あるいは OVC が抱える課題を確認した後の対処方法がわからないのかで、研修機関に重点を置いてほしいポイントをお願いする際の内容が異なってくる）に活かすために研修機関と研修内容の調整を行うといったことがあげられる。これにより、研修の学びをより効果的にするとともに、その後の知識と実践の定着や、また知識を得てケアボランティアによるケアや活動が深化するがゆえに見えるようになった新たな課題に対応しながら活動を展開させ、発展させていくことが可能となる。活動 3 については、南アフリカ事務所スタッフが、研修機関により、研修内容と同様の活動を青少年に実地で提供し、伝えていくパートナー機関として認定されていることから、研修で学んだことを、日常の活動において青少年に繰り返し伝え、定着を図るとともに、青少年自身が活動を展開したり、新しい参加者に伝えられるよう直接側面支援を行う。活動 4 については、南アフリカ事務所スタッフ 3 名がトレーナーとして研修を実施する。 1. <u>OVC に対するコミュニティ内のケアサポート体制の強化</u> Mphego こどもケアセンターのケアボランティア（10 名）を対象に、OVC のケアに必要な情報（カウンセリング（社会心理・子どもの保護含む）、HIV/エイズ・性感染症、救急法、虐待とトラウマ）を学ぶための研修を実施し、ケアの質を改善・向上させる。まず様々な情報に触れることで、自分たちの課題や欠けているものを認識し、役割を理解するところから始める。 1-1. <u>こどもケアセンターにおけるケアの質向上／ケアボランティアの育成（研修）</u> ・対象のケアボランティア（10 名）に対する子どもたちのケアに関する研修を実施

する。研修内容は、①カウンセリング（3日間）、②HIV/エイズ・性感染症（5日間）、③救急法（5日間）、④虐待とトラウマ（3日間）、などを予定しており、それぞれ現地の研修機関に研修を依頼する。（研修機関名：①FAMSA Tzaneen、②CMT、③Red Cross、④FAMSA Vembe）

研修は、Mphego こどもケアセンターの建物内にて実施予定であり、現時点では上記の日数を予定しているが、当団体によるモニタリングやケアボランティアとの協議により、実施時期や日数を調整する。

- ・研修実施後、ケアボランティアらが研修で得た知識を日常の活動で活用して OVC への適切なケアができるよう当団体がサポートし、対応事例があった場合には記録する。

1-2. 子どもを持続的に支えるための地域づくり

- ・ケアボランティアとともにこどもケアセンター事務所にて、こどもケアセンターオープンデーを開催する。オープンデーは、学校の保護者会のように、こどもケアセンターを開放し、地域住民にこどもケアセンターの活動、通っている OVC の様子を見せることで、こどもケアセンターの役割・意義を理解してもらう機会であり、将来的に、地域住民がこどもケアセンターに通っていない子どもをこどもケアセンターにリファールすることにつながる。
- ・当団体スタッフのサポートのもと、ケアボランティア 10 名が中心となって 1 回、1～2 日間開催する計画であり、現在こどもケアセンターに通う OVC（約 130 名）の保護者（約 100 名のうち 20～30 名程度）、地域住民（10～20 名程度）の参加が見込まれる。

2. こどもケアセンターにおける活動強化

こどもケアセンターは子どもにとって安全に過ごせる場所である一方で、「貧しい子ども」のための場としても認識されているため、特に青少年世代の子どもたちは「通っているとことが恥ずかしい」と考える傾向にある。こどもケアセンターを OVC が通いやすい魅力のある場所にするために日常的な活動プログラムを充実・多様化させる。また、学びの場とするため、ケアボランティアが子どもの年齢に応じた活動を提供できるようプログラム研修を実施する。

2-1. こどもケアセンターにおける年齢別活動の実施

- ・対象のケアボランティア（10 名）に対して、こどもケアセンターにおける活動プログラム（ライフスキルなどを OVC たちに伝えるための内容と手法（多くがゲームを通じて学ぶ）、本の読み聞かせや学校の勉強のサポート方法、伝統文化（音楽とダンス）、演劇を使った（社会問題の）啓発方法、子どもたちがチームワークやリーダーシップなどを身に着けるために行うグループに分かれてのゲーム、これらを組み合わせたプログラムづくりなど。ゲームにおいては、地図を読んだり、救急法を学べたり、人の話に耳を傾けたり、他者を尊重することを学ぶための内容やルールが盛り込まれるなどしている）作成のための研修を実施する。OVC の年齢に応じた（①5～10 歳と②11 歳以上）こどもケアセンターの日常的な活動プログラムの導入・基礎編の研修を実施予定であり、それぞれキャンプ形式で、①3 日間×1 回、②5 日間×2 回実施する。研修機関は、KTD。
- ・研修実施後、当団体は、ケアボランティアが研修で得た知識を使って、OVC が参加する日常の活動プログラムを企画・実施できるようサポートする。1 年次はケアボランティアが自分たちでプログラムを組み立て、実施を開始することを目指す。また、隔月で研修機関の KTD がこどもケアセンターを訪問、モニタリングを

行い(KTDの研修プログラムがそういう仕立てになっている)、当団体とともに各モニタリング後2ヶ月間の改善ポイントや注意すべき点を検討し、当団体が日々の活動のなかで改善を図る。

- ・Mphego こどもケアセンターのケアボランティア(10名)と他地域のこどもケアセンターケアボランティアが交流し、互いに学びあう機会を設ける。Mphego こどもケアセンターのケアボランティアが他地域のこどもケアセンター事務所を1日間訪れ、勉強会を実施。他地域のこどもケアセンターは当団体が調整の上決定。

3. 青少年のエンパワメント(これを通じた意識・行動変容)

3-1. 青少年の育成

- ・Mphego こどもケアセンターの青少年約30~40名を対象にリーダーシップ・ライフスキル研修(導入・基礎編)を実施する。研修は、Mphego こどもケアセンターの建物内において研修機関KTDによって実施することとし、チームごとに分かれた様々なゲームやキャンプ形式の研修を通じて、チームワークや共同作業について学ぶ。緊急事態に対応できるよう、ゲーム形式で救急法についても学ぶ。
- ・また、男女を分けて(LGBTは別途検討)ワークショップの機会をもち、女性たちに対しては、自分たちに権利があること、尊厳をもって「No」を言うことができることなどライフスキル、セクシュアリティについて学ぶ。男性については、女性も自分と同様の権利があることなど、女性と同様にライフスキルを学ぶ機会をもつ。

3-2. モニタリングと他団体との交流

- ・3-1の活動後、青少年自身が自分たちの活動プログラムを企画できるよう当団体がサポートする。最初はケアボランティアと協力しながら、30~40名の青少年らが5~6グループに分かれ、各グループが1プログラムずつ企画することを目指す。
- ・また、Mphego こどもケアセンターの青年のリーダーシップ能力を向上させるため、過去にN連で支援したこどもケアセンターと交流を行う。研修は、1~2日間実施予定であり、30~40名が交流団体の事務所へ赴き、交流団体の青少年が日常的に行う活動に参加をしたり、交流団体のメンバーが活動を通じて課題を乗り越えてきた事例などを共有してもらう。また、Mphego こどもケアセンターの青少年らが自分たちの活動を披露してアドバイスをもらったり、お互いの活動や青少年が抱える課題などについての意見交換などを行う。青少年らが他団体の青少年の自宅を訪問し、菜園づくりの実践の様子などについても見学する。こうした活動を通じて、リーダーシップ能力を高める。

4. 菜園づくり

4-1. 菜園づくり研修

- ・ケアボランティア10名、青少年30~40名を対象にMphego こどもケアセンターの敷地内で、当団体スタッフの指導による菜園づくり研修を実施する。こどもケアセンターの菜園(約15m×20m)において、年間を通じて継続的に食べ物を得られるよう、野菜や豆類、メイズを栽培する方法を学ぶ。常時、3~5種類の野菜が植えられていれば、組み合わせで給食に使えるため、そのような状態になることを目指す。豆類やメイズについては保存がきくため、夏季・雨期(10~3月)に可能な範囲で栽培し、不足分は地域の学校からの寄付を求めるなどして補うようにする。1年次は、研修後の収穫時期から、平日5日のこどもケアセンター稼働日のうち最低3日は給食が提供できるようにする。

最初の 1～2 ヶ月に集中的に技術研修を行った後は、それぞれの自宅の敷地で実践できるよう促す。日々の実践のモニタリングを通じて、実践状況を確認し、課題に対応するなどのインプット（必要に応じた技術研修）を行いながら、内容を改善、定着させていく。収穫期後にあたる研修開始から半年後あたりに、収穫や採種・保存、時期準備などの研修を再度行い、再びモニタリングとフォローアップが中心となり、11～12 カ月目に再び次期準備のための研修を行う。

- ・年間雨量 500mm 程度の本事業地においては、水の確保が重要であるためポリタンクを利用して水道水や雨水の確保することを心掛けるよう指導する。
- ・なお、キッチンが雨漏りしており、収穫物の保存と調理に悪影響があるため、1 年次にこれを修繕する。修繕工事では、雨漏りしている現在の屋根を撤去し、新しい垂木と波板鉄板を設置する。工事期間は 3 日間の見込みである。
- ・経験交流を行う。ケアボランティアについては、菜園をすでに複数年実践し続けている過去に N 連で支援したこどもケアセンターから、持続的な維持管理の方法、持続的な実践の意義や変化を学び、技術や課題の経験共有を行う。

< 2 年次 >

活動 1 については、1 年次の成果継続（研修で学んだことが日常的に活用され、ケアの質が向上）に加え、ケアボランティアと地域住民が協力し OVC が抱える新たな課題の発見・確認と、適切な対応・解決が可能となることを目指す。活動 2 と 3 については、ケアボランティアと青少年による日常的な活動プログラムの企画・実施が定期的に行われるようになることを目指す。活動 4 については、栽培計画を立てそれに基づいた研修を実施し、年間を通じた野菜栽培と、それによる収穫物を使って年間を通じてこどもケアセンターの給食を提供できるようにすることを目指す。1 年次の状況をみながらインフラ面の改善が必要な場合には、2 年次に検討する。申請団体の役割については、1 年次同様。

1. OVC に対するコミュニティ内のケアサポート体制の強化

ケアボランティアを対象に、1 年次に実施しなかった残りの研修を行う。また、ケアボランティアが地域関係者と、研修の学びや OVC の状況について情報共有・交換し、地域内で OVC サポートの協力体制をつくれるよう、地域への働きかけを開始する。当団体はモニタリング、フォローアップを行い、学びが定着し、また活用され、地域内のネットワークが広がる適宜アドバイスやサポートなどのインプットを行う。

1-1. こどもケアセンターにおけるケアの質向上／ケアボランティアの育成（研修）

- ・ケアボランティア（10 名）を対象に、1 年次に実施しなかった残りの研修として⑤子どもの人権（5 日間）を実施する。現地の研修機関に研修を依頼する。また、⑥救急法のフォローアップ研修（実践編）も行う（研修機関名：⑤Lamulani Tzaneen、⑥Red Cross）
- ・1 年次に実施した研修①～④を含め、申請団体がモニタリングやケアボランティアとの協議により課題と必要な研修を見極め、必要に応じたフォローアップ研修を実施する。初年度の研修での学びを実際に OVC のケアで活用する中でわからないことや、また情報とスキルを得たからこそ、見えてくる OVC が抱える課題に対応するため。

以上の研修は、Mphego こどもケアセンターの建物内にて実施予定で、当団体によるモニタリングやケアボランティアとの協議により、実施時期や日数を調整・確定していく。

- ・研修実施後、ケアボランティアらが研修で得た知識・情報を日常的に活用し、OVC の課題と解決策を見出しケアの改善に生かしていけるよう、当団体がサポートしていく。また、ケアボランティアにおける研修知識の定着を確認する一方で、ケアボランティアが活動やケア、問題解決事例を記録し、情報を蓄積し、活動に反映していけるよう相談に乗り支援していく。

1-2. 子どもを持続的に支えるためのこどもケアセンター地域づくり

- ・こどもケアセンターに通う OVC の保護者（シングルの親、親を亡くした子供の親族など約 20～30 名）やその他住民（約 10 名）を対象に、OVC が家庭内、地域内で必要とするサポートについて学ぶカウンセリング研修を実施する。ケアボランティア（10 名）もこれに参加する。当団体が研修機関に研修を依頼、トレーナーと内容などを調整する。（研修機関：KTD）
- ・ケアボランティアが中心となってこどもケアセンターオープンデーを開催する（参加見込：保護者や住民約 40～50 名）。当団体は開催をサポートする。1 回につき 1～2 日間開催、2 回程度の開催を見込んでいる。
- ・ケアボランティア（各回約 2～3 名）が学校を訪問して、学校教員（校長＋数名）と OVC に関する情報交換を行うなど、OVC サポートのための協力体制構築にむけた働きかけをおこなう。当団体はこれを促し、支援する。
- ・ケアボランティア（10 名）による OVC の家庭訪問時を行う。1-1 で学んだ知識を保護者に共有し、お互いに OVC の様子を共有、状況を確認する。当団体スタッフはケアボランティアの相談に乗り、これをサポートする。
- ・ケアボランティアと青少年（リーダー的な青少年 5～6 名）が地域住民（特に村内に暮らす保護者以外の住民）を対象とした啓発イベントを開催する。地域のスポーツデー（他団体が主催でサッカーなどをする行事）を利用して実施し、HIV/エイズや子どもの権利、こどもケアセンターの宣伝など、自分たちでその時必要、伝えたいと思うテーマを選んで、参加している子どもや保護者の前で話すことを想定している。啓発イベントで地域住民にこどもケアセンターの役割の理解を促す一方で、こどもケアセンターに通ったことのない子ども（潜在的な OVC）たちがこどもケアセンターに関心を持つきっかけをつくる。啓発イベントは、ケアボランティアや青少年に開催の経験がないため、当団体がこれをサポートする。
- ・当団体は、ケアボランティアが地域に働きかける際に「こどもケアセンターのケアボランティア」と認知されるよう、ユニフォームを支援する。

1-3. こどもケアセンター組織基盤強化

- ・ケアボランティア（10 名）およびこどもケアセンターの理事（2～3 名）を対象とし、現地の研修機関（Lamulani）による組織運営／ガバナンス研修を実施する。当団体が研修機関に依頼、トレーナーと内容などを調整する。研修は、Mphego こどもケアセンターの敷地内の建物で行う。
- ・研修後に、ケアボランティアと理事との将来的な組織運営についての話し合い、ケアボランティアによる活動資金調達の多角化に関する話し合いなどを行う。申請団体はこれらの場の設定を促し、モニタリングとフォローアップを行う。

2. こどもケアセンターにおける活動強化

2-1. こどもケアセンターにおける年齢別活動の実施

- ・ケアボランティアら（10 名）が年齢に応じたこどもケアセンタープログラム研修を継続する。1 年次に実施の「導入・基礎編」に続いて、2 年次には「応用・実践編」の研修を行う。OVC の年齢に応じた（① 5～10 歳と② 11 歳以上）内容

で行い、それぞれキャンプ形式で、①3日間×2回、②3～5日間×1～2回を想定している。当団体が研修機関（KTD）に研修を依頼、トレーナーと内容などを調整する。

- ・研修後にケアボランティアが自分たちだけでこどもケアセンターの活動プログラムを企画・実施、それが定期的に行われることを目指す（週2日程度）。当団体は、モニタリングとフォローアップを通じて、実施の促進とサポート、内容の改善などを行う。
- ・他団体との経験交流の実施。他団体から学ぶと同時に、自分たちの学びを地域内の他団体に伝え、教える機会もつことで、自分たちの活動を見直し、改善していくことに繋げる。Mphego こどもケアセンターのケアボランティアが他地域のこどもケアセンター事務所を1日間訪れ、互いの活動を披露し合うなかで学ぶ機会をつくる。1～2回を想定。他地域のこどもケアセンターは当団体が調整の上決定する。
- ・また、青少年の態度・行動変容等が見られた際のケアボランティアによる記録を促進する。

3. 青少年のエンパワメント（これを通じた意識・行動変容）

3-1. 青少年の育成

- ・こどもケアセンターに通う青少年を対象としたリーダーシップ・ライフスキル研修を継続実施する。1年次にも通っていた30～40名の青少年に加え、約20名の新しくこどもケアセンターに通い始めた青少年に向けて、1年目の「導入・基礎」の次の、2年目の「応用・実践（ゲームを通じたチームワーク、子どもの権利、HIV/エイズ予防啓発、男女別々の性に関する研修など）」を実施する。申請団体が研修機関（KTD）に依頼、トレーナーと内容などを調整する。

3-2. モニタリングと他団体との交流

- ・青少年自身50～60名の青少年らが7～8グループに分かれ、各グループが2プログラムずつ企画しながら、毎週1回は何等かの活動プログラムが行われるようサポートする。ケアボランティアとともにこれをサポートする。また当団体は、モニタリングとフォローアップを通じて、実践が定着し、内容を改善・定着させていくようサポートする。
- ・当団体は、1年次の研修の学びを、1年次に研修を受けた青少年がケアボランティアと協力しながら、新しく通い始めた青少年らに共有していくようサポートする。
- ・他団体青少年との経験交流を実施する。青少年が学ぶだけでなく、自分たちの学びを地域内の他団体に伝え、教える機会ももつ。申請団体が他団体と調整し、ケアボランティアと協力しながら実施する。各回1～2日間、1～2回実施予定。青少年30～40名が交流団体の事務所へ赴いて行う。

4. 菜園づくり

4-1. 菜園づくり研修

- ・当団体スタッフによるケアボランティア10名を対象としたこどもケアセンターの敷地およびケアボランティアの自宅での菜園づくり研修の実施。2年次は、特に栽培の計画づくりとそれに基づいた栽培を学ぶ。またモニタリングに力を入れ、実践が定着するよう、技術のフォローアップを行う。
- ・こどもケアセンターの菜園（約15m×20m+5m×5mの範囲を広げて約20m×25m）において、年間を通じて継続的に食べ物を得られるよう、計画に基づいて、常時

5～6 種類の野菜や豆類、メイズを栽培する方法を学ぶ。豆類やメイズについては保存がきくため、夏季・雨期（10～3 月）に可能な範囲で栽培し、不足分は地域の学校からの寄付を求めるなどして補うようにする。研修後の収穫時期から、平日 5 日のこどもケアセンター稼働日のうち最低 4 日は給食を提供し、野菜食材については全てを菜園から賄えるようにする。

- ・また、自分たちの実践の意味・意義の理解を深める一助とするため、気候変動や種子の多様性など、農業・菜園づくりを取り巻く環境の変化や政策について学ぶ座学の研修も行う。
- ・青少年によるこどもケアセンターの敷地および自宅での菜園づくり研修の実施。特に新しく参加した約 20 名の青少年を中心に研修を提供する。1 年次に研修を受けた 30～40 名の青少年については、フォローアップを通じて、実践（特に自宅的菜園）の定着に注力する。学校もありまた子どもでもあるため、継続的な栽培の実践にはケアボランティアより時間を要する。このため、2 年次には、年間を通じて、一種類でもいいので何かを栽培できるようになることを目指す。
- ・主にケアボランティアらが、他団体の実践状況、菜園活用方法から学ぶための経験交流を実施。特に、一年を通じてこどもケアセンターでの食事が提供できるような栽培計画の立て方を学ぶ。
- ・栽培する種類が増え、また敷地も増えることから、乾季と水道の水が出ない時期に水が確保されるよう、1 つの水タンクの土台を建設・設置する。

< 3 年次 >

3 年次は活動 1～3 については、モニタリングとフォローアップを中心に行い、2 年次までの学びと成果の定着を確実なものとし、かつ持続的なものになるよう注力する。持続的なものとは、すなわち、2 年次の成果が継続し、ケアボランティアと地域関係者の OVC サポート体制が定着していること、またケアボランティアと青少年が学びや実践の内容を、新しく通い始めた青少年や幼少の OVC や地域関係者に的確に伝えていくなど、本事業の学びが「研修参加者」のみにとどまらず、世代とこどもケアセンターを超えて伝わっていくようになっている状況を目指す。

一方で、本事業を通じて、OVC（青少年）自身が、事業の学びと実践を通じて、態度・行動を変容させ、それが揺るがないものとして定着し、また啓発活動など自ら地域にアプローチしていくことを目指しているが、この変化を確実なものとするには 3 年以上を要することが、申請団体が 2017 年度まで行っていた N 連事業の経験から想定される（当時の事業においては 5 年かかった）。態度・行動変容を目指すのは、彼ら・彼女ら自身がモデルとなることで、OVC を「弱者」「貧しい」としてだけ見る地域の日や考え方が変わり、OVC であっても堂々と、自信と希望をもって生きていけるという価値観が人びとの間に浸透する。そのことがまたこどもケアセンターという場の価値を高めることと信頼につながり、これを通じて、地域とこどもケアセンターとの協力体制が強化され、OVC に対するケアサポートが根付いた地域社会へと変わっていくことが、3 年間の活動を通じて期待されているためである。これを確実なものにするために、3 年目の活動を行う。

申請団体の役割については、1 年次同様。

1. OVC に対するコミュニティ内のケアサポート体制の強化

3 年次は、こどもケアセンターを中心にケアを提供しながら、2 年次から開始をした地域住民や学校との関係構築を通じて、困難な状況にある OVC たちを発見し、こどもケアセンターにリファ、あるいはこどもケアセンターから学校や病院、ソー

シャルワーカーなどにリファーするなど、地域内で、住民や関係者が協力しながら OVC をサポートしていける体制の強化と定着を目指す。 <u>1-1. こどもケアセンターにおけるケアの質向上／ケアボランティアの育成（研修）</u> ・ ケアボランティア（10 名）による OVC ケアサポート定着と内容の改善を目指し、申請団体は日々の記録に応じた状況確認と相談など、モニタリングとフォローアップを中心に行う。活動記録継続・定着させ、活動に反映するよう働きかける。 ・ 必要な場合のみ、フォローアップ研修を実施する。 ・ こどもケアセンターの衛生環境確保の観点からトイレを 1 か所（男女一基ずつ）建設する（今は壊れかけているものが 1 つあるのみ）。 <u>1-2. 子どもを持続的に支えるためのこどもケアセンター組織強化と地域づくり</u> ・ ケアボランティアによる、OVC 保護者、学校教員、OVC 保護者以外の住民などへの働きかけ、協力体制が定着するよう注力する。特に、こどもケアセンターに通っておらず課題を抱えた OVC を地域内で発見した際にこどもケアセンターへの参加を促進することや、地域住民と協力しての課題解決の定着、強化、改善を行う。当団体はモニタリングとフォローアップを通じてこれを支援していく。 ・ 2 年次に続いて、ケアボランティアがコミュニティ内での啓発活動を青少年（数名程度）とともに実施する。年 2 回程度を想定（1 回は青少年中心に実施）、OVC の保護者や地域住民（約 100 名程度）が参加することを見込んでいる。当団体は必要に応じてこれをサポートする。 ・ ケアボランティアと青少年が協力してオープンデーを開催する。2～3 回程度の開催、各回、OVC の保護者と地域住民約 30～50 名程度の参加を想定。申請団体は必要な場合のみサポートする。 <u>1-3. こどもケアセンター組織基盤強化</u> ・ ケアボランティア（10 名）およびこどもケアセンター理事（2～3 名）を対象としたガバナンス研修のフォローアップ研修を実施する。申請団体が研修機関（Lamulani）と内容などを調整、研修機関が研修を提供する。研修は、Mphego こどもケアセンターの敷地内の建物で行う。 ・ こどもケアセンターは基本的には社会開発省から資金を得て活動を行うが、資金支給状況が不安定なため、他の資金調達方法などについても検討する。事業期間内に資金確保までは目指さないが、他にも資金獲得の方法があるという発想をもてるように当団体が情報提供していく。可能であれば 1～2 件申請してみる。当団体はモニタリングとフォローアップを通じて、これらの動きを促進していく。 <u>2. こどもケアセンターにおける活動強化</u> 活動 2 と 3 においては、ケアボランティア（10 名）や青少年ら（50～60 名）が提供・実施できる活動プログラムの多様化と定着、またケアボランティアと青少年らが、新しく通い始めた青少年あるいは年少の OVC らに伝え、活動に巻き込んでいけるようなスキルの定着をはかる。 <u>2-1. こどもケアセンターにおける年齢別活動の実施</u> ・ ケアボランティア（10 名）による日常的な活動プログラムを多様化し、その定着を図る。そのためにこどもケアセンタープログラム研修（実践編）を継続するが、頻度を落とし、年 1 回の実施とする。キャンプ形式で 3～5 日間程度を想定している。当団体が研修機関（KTD）と内容を調整し、依頼する。
--

- ・研修後は、当団体スタッフが、特にモニタリングとフォローアップに注力し、こどもケアセンターでの多様な活動プログラム実施が定着するようサポートしていく。
- ・また、ケアボランティアが、新しく通い始めた青少年や幼少の OVC に活動ウログラムを伝え、巻き込めるように、当団体は、モニタリングとフォローアップに注力する。活動 3 を通じて青少年ら自身が新しい／年少の青少年に伝えていくことも想定しており、ケアボランティアが青少年の活動のサポートができるようになることに目指す。

3. 青少年のエンパワメント（これを通じた意識・行動変容）

3-1. 青少年の育成

- ・特に新しくこどもケアセンターに通い始めた約 25 名の青少年を中心に、ライフスキル・リーダーシップ研修を実施する。当団体スタッフが、研修機関（KTD）と内容を調整し、依頼する。3～5 日程度キャンプ形式で、1 回行い、不足部分はケアボランティアや以前から通う青少年らが伝えていく。当団体はこれをサポートする。
- ・2 年目までは 11～18 歳世代の内容を学ぶが、研修機関は 20 代前半に向けた、少しレベルの高い内容のプログラムも提供しているため、3 年次には必要に応じて、10 代後半から 20 代前半の青少年（10～15 名程度想定）を対象に、地域社会への働きかけ・啓発の方法に関する研修を提供することも想定している。

3-2. 持続性確保のためのモニタリング

- ・10 代後半から 20 代前半世代の青少年らを中心に、ケアボランティアと協力しながらコミュニティ内での啓発を企画・実施する。2 回程度の開催を想定、1 回は青少年らが中心となって企画・実施する。当団体はその促進とそのサポートを行う。
- ・2 年次までに研修を受けた青少年（50～60 名）から新しく通い始めた約 25 名の青少年／年少の世代の新しく青少年世代となる OVC（数は不明）への情報共有と活動への巻き込みを活動を通じて行うことで、伝えるスキルが定着することを目指す。当団体は、その促進とサポートを行う。3 年次に参加した青少年も自ら実施・企画できるように当団体もモニタリングとフォローアップを通じてサポートする。
- ・また、当団体は、約 75～85 名の青少年らが、自分たちで多様な活動プログラムを組み立て、定期的実施する（週 2 回程度）ことを支援し、また定着するようモニタリングとフォローアップに注力する。

4. 菜園づくり

4-1. 菜園づくり研修

- ・ケアボランティアについては、フォローアップとモニタリングに注力する。実践状況（計画に基づき常時 5～6 種類野菜、豆、メイズ栽培）と給食提供状況（最低週 4 日提供、野菜は全て菜園から）については、2 年次と同様の状況が継続されることを目指す。
- ・新しい青少年への研修の実施。約 25 名程度増えることを期待・想定しており、特にこれらの青少年と、新しく青少年世代になった OVC ら（人数は年によって異なるため不明）への研修を行う。研修はこどもケアセンターの敷地で行い、実践は青少年らの自宅の敷地で行う。
- ・1～3 年次に研修に参加した青少年ら（70～80 名程度）による年間を通じた継続

	的な実践の定着を確実なものとするためのモニタリングとフォローアップを実施する。 ・ 青少年への研修時にケアボランティア（10 名）を巻き込み、事業終了後はケアボランティアが伝えていけるよう「教える」ための技術研修を実施する。 また、当団体の過去の事業経験から、2、3 年次より、近隣の住民が関心を示し、教えを請うようになることが想定されており、当団体はケアボランティアが教えることを後押し、これを実地にてサポートしながら、教える技術を伝える。 ・ 必要に応じた他団体との経験交流の実施。ケアボランティアや青少年が彼らの培ったノウハウを他団体に教え、伝えるという経験の場をつくることを想定している。このため、他団体が Mphego こどもケアセンターを訪問することを想定している。対象の他団体は当団体がケアボランティアと協力しながら調整、決定する。 ◆直接受益者： チュラメラ地区ムペゴ村 Mphego こどもケアセンターのケアボランティア計約 10 名、両こどもケアセンターに通う OVC 計約 130 名（うち青少年世代の OVC は約 30 ～40 名。2 年次以降、毎年約 10～20 名の新しい OVC、特に青少年世代の OVC が通い始めることを想定している。） ◆間接受益者： こどもケアセンターに通う子どもの保護者（約 100 名程度）、地域の学校の教員（2 校×校長 1 名＋教員 3～4 名）、ソーシャルワーカー 1 名、村長 1 名、クリニック 1 か所（看護師 3～4 名）、その他地域住民など（約 1, 200 世帯、7, 200 名/1 世帯 6 名で計算）。 ※こどもケアセンターは村の中にあり、コミュニティ内の日常的な「OVC サポート機関」として位置づけられているため学校とは違い、OVC は毎年入れ替わるわけではなく、通常同 OVC が高校卒業まで通う。対象年齢は、5 歳～20 代前半を想定（20 代前半で高校に通う OVC もいるため）。こういった背景から本事業においてこどもケアセンターに通う青少年（OVC）らに対しては複数年でのアプローチが可能となる。
（6）期待される成果と成果を測る指標	【プロジェクト目標】活動対象地における地域住民による OVC へのケアサポート体制強化と青少年のリーダーシップ育成 ＜1 年次＞ 【今期事業達成目標】ケアボランティアが OVC のケアに関する知識を得て、それを活用し始める。 （成果 1）ケアボランティア 10 名による OVC への対応事例が見られる。 ・ 指標 1：ケアに関する研修後に、研修で得た知識を活用した OVC へのケア対応事例が 30 件確認される（ケアボランティア 1 人×2～4 件の対応×10 名より算出） 【今期事業達成目標】ケアボランティアがこどもケアセンターの活動を改善するための知識を得て、それを活用し始める。 （成果 2）ケアボランティアが自らこどもケアセンターにおける活動プログラムを企画・実施している。 ・ 指標 1：1 回目の研修後から、ケアボランティア 10 名が協力して、年齢ごと（10 歳まで、11 歳以上）に 2～3 の活動プログラムを企画・実施している（週 1 回程度。初年度なので不定期でもいいこととする）。 ・ 指標 2：1 回目の研修後に、こどもケアセンターに通っている OVC の数が減らず

に安定している（目安として申請時点で約 130 名の OVC が通っておりこれが減らないこと）

【今期事業達成目標】青少年がリーダーシップ研修を受けて、知識を得て、それを活用し始める。

（成果 3）：青少年らがこどもケアセンターにおける活動プログラムを企画・実施している。

- ・ 指標 1：30～40 名の青少年らが、5～6 グループに分かれ、各グループが 1 活動プログラムを企画し、こどもケアセンターの活動で実施している（不定期。とにかく各グループが 1 プログラムずつ企画・実施できたらいい）。

【今期事業達成目標】ケアボランティアと青少年が菜園づくりにより年間を通じて何等かの食べものを得られるようになる。

（成果 4－1）：こどもケアセンターの菜園において、年間を通じて何等かの野菜が栽培され、給食に提供されている。

- ・ 指標 1：ケアボランティア 10 名がこどもケアセンターの敷地で常時 3～5 種類の野菜を、年間を通じて栽培している。
- ・ 指標 2：研修後は、年間を通じて、こどもケアセンターの週 5 日の稼働日のうち最低 3 日は給食が提供され、野菜食材が全てこどもケアセンターの菜園の収穫物から提供される。
- ・ 指標 3：ケアボランティアが給食の提供内容を記録している。

（成果 4－2）：青少年が自宅でも菜園から食べものを得られる。

- ・ 指標 1：研修に参加する青少年約 30～40 名のうち 7 割の青少年（20～30 名）が自宅で菜園づくりを開始している。

（成果 4－3）：収穫物の保存・管理環境が整う。

- ・ 指標 1：こどもケアセンターのキッチンが修繕される。

<2 年次>

【今期事業達成目標】ケアボランティアが、コミュニティ関係者と協力し、OVC が抱える課題を発見・確認し、適切な対応をしている。

（成果 1）ケアボランティア 10 名が、コミュニティ関係者（保護者・住民・学校など）と協力しながら、こどもケアセンター内外の OVC が抱える課題を新たに確認・発見し、対応している。

- ・ 指標 1：こどもケアセンターに通う OVC の新たな課題が確認され、対応される事例が約 15 件確認される（ケアボランティア 1 人×1～2 件×10 名より算出）。
- ・ 指標 2：コミュニティ関係者からのこどもケアセンター内外の OVC に関する相談・情報提供に応じた事例が、年間約 15 件確認される（住民等からの相談・情報提供件数として毎月 1～2 件を想定）。
- ・ 指標 3：コミュニティ関係者からの紹介により、新たな OVC が 10～20 名こどもケアセンターに通い始める

【今期事業達成目標】ケアボランティアがこどもケアセンターにおける活動を定期的に企画・実施している。

（成果 2）：ケアボランティア 10 名が協力しながら、OVC の年齢に応じた活動プログラムを定期的に企画・実施している。

- ・ 指標 1：ケアボランティア 10 名が協力しながら、年齢別の活動プログラムを週

に 2 回実施している。

- ・指標 2 : 1 年次よりも実施できる活動プログラムが年齢ごと (10 歳まで、11 歳以上) に、5~6 種類増加している。
- ・指標 3 : 新しく通い始めた OVC20~30 名 (成果 1・指標 3 の 10~20 名+成果 3-2・指標 2 の 10 名) を含む約 150~160 名の OVC が継続的にこどもケアセンターに通っている。

【今期事業達成目標】青少年によるこどもケアセンターの活動プログラムの企画・実施が定期的に行われている。また、青少年の間に態度・行動変容が見られ始める。
(成果 3-1) : 青少年がこどもケアセンターにおける活動を定期的に企画・実施している。

- ・指標 1 : 1 年次から研修を受けている 30~40 名の青少年らが中心となり、新しく通い始めた約 20 名の青少年 (成果 1・指標 3 の 10~20 名の OVC うちの約半数が青少年と想定+成果 3・指標 2 の 10 名) が参加し、7~8 グループに分かれ、各グループが 2 つの活動プログラムを企画している。これらが順番にあるいは組み合わせられて、週に 1 回実施されている。

(成果 3-2) : 青少年の間に態度・行動変容が見られ始める。

- ・指標 1 : 約 15 名の青少年の間に態度・行動変容が確認される。
- ・指標 2 : 青少年から情報を得て約 10 名の OVC がこどもケアセンターに通い始める。

【今期事業達成目標】こどもケアセンター敷地内の菜園の収穫物を使って年間を通じてこどもケアセンターの給食を提供できるようになる。また青少年が年間を通じて菜園づくりを行っている。

(成果 4-1) : こどもケアセンターの菜園において、年間を通じて、計画に基づいて複数種類の野菜が栽培され、収穫物給食が提供できるようになる。

- ・指標 1 : ケアボランティア 10 名がこどもケアセンターの敷地で計画に基づいて、常時 5~6 種の野菜を、年間を通じて栽培している。
- ・指標 2 : 年間を通じて、こどもケアセンターの週 5 日の稼働日のうち最低 4 日間は給食が提供され、野菜食材は全てこどもケアセンターの菜園の収穫物から提供される。主食のメイズの一部 (可能な範囲) も菜園から提供される (メイズやたんぱく質食材などは学校からの寄付や社会開発省からの資金で多くを賄うことを想定。ただこれも十分でないため栽培し、給食提供日数を増やす)。

(成果 4-2) : 研修を受けた青少年が自宅あるいはこどもケアセンターでの菜園づくりを年間を通じて実践する。

- ・指標 1 : 研修を受けた青少年約 50~60 名 (初年度 30~40 名、2 年次約 20 名 (成果 3-1 指標 1 参照)) のうち 80% が年間を通じて菜園づくりを実践、常に何かを栽培している。

<3 年次>

【今期事業達成目標】こどもケアセンターとコミュニティ関係者の協力による地域内の OVC ケアサポート体制が定着している。

(成果 1) : ケアボランティアとコミュニティ関係者 (保護者・住民・学校など)、および青少年が協力しながらの、こどもケアセンター内外の OVC の課題の発見と対応が継続・定着している。

- ・指標 1 : こどもケアセンター内外の OVC の新たな課題が、ケアボランティア自身により、あるいはコミュニティ関係者からの情報提供により確認され、対応される事例が、年間約 20 件確認される。

・指標 2：コミュニティ関係者からの紹介により新たな OVC が 10～20 名こどもケアセンターに通い始める。 ・指標 3：こどもケアセンター内外の OVC の課題について、こどもケアセンターに通う OVC（特に青少年）による情報提供により確認され、対応される事例が、年間約 5 件確認される。 （成果 2）：こどもケアセンターの衛生環境が整備される。 ・指標 1：こどもケアセンターの敷地内にトイレが 1 か所（男女 1 基ずつ）建設される。 【今期事業達成目標】ケアボランティアによるこどもケアセンターの定期的な活動プログラムの企画・実施が定着している。 （成果 2）：ケアボランティア 10 名が協力しながら、定期的な年齢別の活動企画・実施が継続されている。 ・指標 1：ケアボランティア 10 名が協力しながら、年齢別の活動プログラムを週に 3 回実施している。 ・指標 2：2 年次よりも実施できる活動プログラムが年齢ごと（10 歳まで、11 歳以上）に、5～6 種類増加している。 ・指標 3：3 年次に新しく通い始めた OVC 25～35 名（成果 1・指標 2 の 10～20 名、成果 3－2・指標 3 の 15 名）を含む約 175～195 名の OVC が継続的にこどもケアセンターに通っている。 【今期事業達成目標】青少年によるこどもケアセンターの活動プログラムの企画・実施が定着している。また、新しく通い始めた青少年からも活動プログラムを作ることができる。青少年らがお互いにサポートし合いながら課題解決を行えるようになる。 （成果 3－1）：青少年がこどもケアセンターにおける定期的な活動の企画・実施を継続している。 ・指標 1：2 年次までに研修を受けた青少年（約 50～60 名）らが中心となり、新しく通い始めた約 25 名の青少年（成果 1・指標 2 の 10～20 名の OVC のうち約半数が青少年と想定+成果 3－2・指標 3 で参加した約 15 名）が参加し、9～10 グループに分かれ、各グループが 3 つの活動プログラムを企画している。これらが順番にあるいは組み合わせられて週に 1～2 回実施されている。 （成果 3－2）：3 年次に新しく通い始めた青少年からも活動プログラムを企画・実施している。 ・指標 2：年度後半に、新しく通い始めた約 25 名の青少年が、2 年次までに通っていた青少年とケアボランティアのサポートを得ながら、自分たちだけで 5 つの活動プログラムを企画・実施する（頻度は問わず、5 つ作り、実施できたらいい）。 （成果 3－3）：青少年同士が互いにサポートしながら青少年が抱える問題への対応ができるようになる。 ・指標 1：新たに約 15～20 名の青少年の間で態度・行動変容が見られる。 ・指標 2：青少年同士がお互いにサポートし合うことで課題に対応した事例が 5 件確認される。 ・指標 3：青少年からの情報を得て約 15 名の OVC がこどもケアセンターに通い始める。 【今期事業達成目標】こどもケアセンター敷地内の菜園づくりと収穫物を使った

	給食提供が定着している。ケアボランティアが菜園づくりの技術を他者に教えられるようになる。また、研修を受けた青少年の間で実践が定着する。 (成果 4-1): こどもケアセンターの菜園において、年間を通じて、計画に基づいて複数種類の野菜が栽培され、収穫物から給食が提供できる状態が継続している。 ・指標 1: こどもケアセンターの菜園づくりと給食提供について、2 年次と同様の状況が継続・定着している。 (成果 4-2): ケアボランティアが菜園づくり (畝の準備から収穫までの一連の技術) を他者に教えることができる。 ・指標 1: ケアボランティア 10 名のうち 5 名以上が菜園づくりに関する情報をコミュニティ内の住民に教え、住民が菜園を作り始める事例が 10 件以上確認される (6 名のボランティア×2~3 人より算出)。 (成果 4-3): 1~3 年次に研修を受けた青少年が自宅あるいはこどもケアセンターで菜園づくりを年間通じて継続する。 ・指標 1: 研修を受けた青少年約 75~85 名 (2 年次まで 50~60 名、3 年次約 25 名 (成果 3-1 指標 1 参照)) のうち 80%が年間を通じて栽培を実践、継続している。
(7) 持続発展性	本事業は現地こどもケアセンターを通して事業を実施する。こどもケアセンターは、エイズ遺児を含む困難な状況に置かれた子どもたち (OVC) の放課後支援を行うコミュニティ活動として、南アの社会開発省が推奨している。元々はエイズ遺児への食事の提供を主な目的としていたが、近年はより広範な背景をもつ子どもたちに対応している。このように政府の政策にも取り入れられている組織と協働することで持続性を確保する。特に、活動対象地のチュラメラ地区社会開発行政が協力的であり、地域内の他のこどもケアセンターとのネットワークを活かし、学びの共有の機会ももっていききたい。ただしこれは地区行政とこどもケアセンターの関係性によるため活動を進めながら可能性を見極める。Mphego こどもケアセンターは村内の関係者・ソーシャルワーカーとの協働実績があり、事業の成果が同こどもケアセンターの活動を通して波及、持続されていくことが期待される。 また、本事業では、同こどもケアセンターが先行的な経験をもつ団体との経験交流を通じ、事業終了後も必要に応じて相談、サポートが受けられるネットワークを地域内 (郡内・州内) に構築することも視野に入れている。一方、周辺村のこどもケアセンターとはすでに関係があり (各行政地区下にこどもケアセンターフォーラムと言われるネットワークがあり、Mphego こどもケアセンターはこれに参加している。将来的にこれらのこどもケアセンターに本事業を通じた学びと成果を共有して、サポートしていくよう意識啓発も行っていく。 このように、本事業ではいちこどもケアセンターを通じての活動が地域内で広がりをもつような関係構築を視野に入れていることから、事業終了後の波及効果、発展性が期待される。

(ページ番号標記の上、ここでページを区切ってください)